
もう一人の死神代行

水風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の死神代行

【Nコード】

N0422Z

【作者名】

水風

【あらすじ】

藍善の反乱から5ヶ月がすぎ、何事もなかったかのように過ぎていく時間。

しかし、突然現世にまたもや事件が！

（一護が死神の力失ったとかは無視してね！）

死神代行黒崎一護！（前書き）

いつものように、虚退治に終われる死神代行黒崎一護。しかし、突然の出来事であった後ろから突然切られ。

瀕死状態となってしまった一護。しかし、魔法を使う一人の少年に助けられるのであった

死神代行黒崎一護！

「仕方ないな、こんなところで使う事になるとは、思わなかったなあゝ吸い込み開始！」

そのかけ声とともに彼の手の平へと吸い込まれる一護。一体この少年は何者なのか？

時間が過ぎていき、6時間後。

「ん？ここ、どこだ？何も見えねえ。なにかに閉じ込められてんっておわゝ！！！！！！」

一護が、またもや吸い込まれ、彼の手の平から出てきた。

「っててて！ってここ浦原商店か！？なんでここに？ってあれ？そういうば俺誰かに切られたような？」

「あゝ？」

とっさに一護は振り向き、後ろを見た、するとそこには知らない小中ぐらいの少年が立っていた。

「お前、誰だ？」

「えゝと、たまたま通りかかった人ですが、その格好は死神？ですか？」

一護は驚いた、こんな少年が死神の事を知っているなんて思いもしなかった。

「彼は、あなたを助けた人ですよ黒崎サン。」

自分の名前を呼ばれた一護は、またもや振り向くと、元12番隊長長ならびに、初代技術開発局局長、浦原喜助が座っていた。

「浦原さん！　って俺が助けられたってどういう事だ？てゆうかこんなひよろひよろなガキに俺をおぶってここままでくるって無理な話しじゃゝってこいつ！死神の姿が見えてんのかよ！？」

今頃気づいた一護をほっという浦原が話しを続ける。

「彼はおぶっていったんじゃないくて、空間移動能力を使って手の平に吸い込ませ別次元に飛ばし、それでここに戻したっていう事です

よ♪」

一護は話しについていけなくなり首を傾げた。

「つまり、あなたを手の平のどこでもドアを使って別の場所に移動させてここに移動させたっていう感じですかね？」

何となく状況を理解した一護は、この少年が何者なのかが分からなくなってきた、とりあえず問い掛けた

「お前、何者だ？」

そう、問いかけられ、自己紹介をした。

「僕の名前は、水谷紘。魔法が使えるのが特殊能力で、別世界から来た。僕の住んでいたのは地球だったけどある組織に招待されて、今はそこで暮らしているんだけど上からの命令でソウル ソサエティの手伝いに来た。てゆうかさっき来たばかり何だけど…なんだかあなたを別世界へ移動させている途中でなんだか、とても気持ちよい感覚になったんだけど…」

一護は、その気持ちよい感覚とゆうのはとりあえず後まわしにして、その別世界の事を聞こうと思ったが、浦原に先をこされた。

「そうそう、それでさっきの話の続きなんです…」

ふと思いだしたように水谷が表情を変える。

「ああ、僕が来たところは、ミッドチルダというところで魔法文明が発達していて、僕はそこの魔導師として働いてですね、それですね。僕達はリンカーコアっていう霊力の源のさけつみたいなものです。まあだから死神の姿が見えるというわけです。」

かなりの話しの長いもので一護はさっぱり分からなくなっていた。

浦原は理解出来たようだ。

「あ、そうだ、これ渡したいンスけどちょっとこっちに来て下さい。」

一護はふと、気づき、さっきの気持ちよい感覚の正体を考えていたが、すぐにその必要が無くなった。

なぜなら、

彼が浦原の杖によって魂が抜かれ、その姿は

死神だったのだから。

死神代行黒崎一護！（後書き）

新しく書きました。

B L E A C Hと魔法少女リリカルなのはのコラボなのですが、なのははやてが出るのはまだ先という事になってしまいますが。

もちろん水谷紘ってオリキャラですよちなみに読み方は「みずたにひろ」となりますが、ラーメン食いながら適当に付けた名前です。

いざ勉強会！（前書き）

異世界からやって来た少年に助けられた死神代行黒崎一護。しかし、その少年にもう一つの力があつた。

いざ勉強会！

「うわあああああ！！！！僕がもう一人いる！てゆうか動かない！？しかもこの刀にこの黒い服ってまさか…？」

「死神っス！」

かなり動揺している水谷にあっけなく答える浦原

「浦原さん、普通の人の死神化ってあんのかよ！？」

一護は今自分が質問出来るただ一つの質問だ

「無いっス！♪しかし、死神化した理由は二つ、肉親が死神の場合、黒崎サンのようにね、もう一つは、死神からの死神の力の譲渡、これもまた黒崎サンと同じっスね。」

一護はあっけなく答えられたがまた一つ質問が増えたような顔して、また浦原に質問する。

「じゃあ、肉親が死神って事か？」

「それはなんです、なぜなら、肉親が死神ならば、霊力があるはずですしね。」

一護は一瞬顔を緩ませたがようく考えて見ると、まだ納得がいかなかったため、さらに質問する。

「じゃあ、どうやって死神になったんだ？死神からの譲渡でもねえし。」

浦原は少し考えこむかのように少し、頭を下げ、すぐに、顔上げた。

「黒崎サン、これは死神の譲渡っスよ。」

一護はもう意味がわからなくなり、少しの間考え込みまた質問する。

「じゃあ、誰からだ？」

そう質問したが、浦原の返事は、「あなたの事を一番よく知っている人物です」と言われ、色んな死神を思い浮かべるが、全く思いつかない。そんな一護に浦原は、「あたしのかなり近くに人っス」といわれ、頭を整理してみる

まずここにいるのは、一護、浦原、水谷の三人であり、水谷はまず

違う、一護もまず譲渡はしていない、浦原は、あたしの近くといった。これでは全く分からない。

「しょうがないっスねえ。彼に、死神の力を譲渡したのはあなたっスよ、黒崎サン。」

「俺は、そんな事した覚えはねえーぞ!？」

「彼はどうやってあなたを運んだんでしたっけ？」

確か、別世界に飛ばしてどうのこうのだから、と言葉を探そうとしたらいきなり。

「そのとうりっス!」

「俺まだなんも喋ってねえぞ？」

この時すでに話が全く分からない水谷は、黙って聞いている。

「そうそう、この話はあたしもこれ以上答えられないんで、あたしの考えを述べたいんスけど、いいっスよね？」

「ああ、も…」

「わっかりましたア!」

さっきから全て、自分がいい終わる前に、全て言って来る浦原に少々イライラしてきた一護だが、とりあえず浦原の話を聞く事にした。「あなたにはこれから、修行してもらいます、嫌といってもムリやりやせますがね!♪」

「(僕に選択肢はないんだな。)」

そういった後に浦原は何か思い出したような口振りで変な薬品を一護に見せる。

「なんだよ、これ？」

「とりあえず見て下さいっスあれを!」

しかし、一護向いた方向と、浦原が指を指した向きは、ただのふすましかない。

「どこみてんすか?こっちですよこっち。」

「(畜生オ!!!)」

マンガであれば、リアル一護になっているほどの声を心の中で言う。「ちよっとこれ飲んで下さい!♪」

一護は目を丸くして見た、なぜなら、
色 青

中に入っているもの 変なほこりみたいなの
匂い 理科室

だったからだ。一護は拒否したが、浦原がムリヤリ飲ませようとする。

「や、止めろ！」

「いやっス♪」

「俺は絶対飲まねー！」

「何かに誓ったような口振りっスねえ」

「ちよっとまで浦原さん！それ、何かを俺に言わそうとしているんじゃない！」

この時一護が思ったのは卅解の会得の時に斬月に言った結構かっこいいあの言葉である。

「じゃあその言葉、言って下さい♪」

「それは言わねえよ！」

即答で一護は答える

「言わないとクラスメイトの記憶を操作して、毎日コンさんみたいな事をしていると思わせるさいみ…」

「分かった！言う！言えばいいんだろ！？言えば！」

「それがいやならジャステイスハチマキのやつでもいいスけどねえ。」

「一護も、もはや突っ込む気力も無くなり、言う決心を決める

「俺のたまうっ！おわあああ！！！！！」

「どうすか？おいしいっスか？」

一護は「魂」よりも恥ずかしい「たま」で区切ってしまい、しかも浦原に変なのを飲まされたのだ。

「な、何すんだよ！」

「あ、そうそうこっちのも飲みます？今のやつよりも改良したんスよ」

「違いは？」

「ビタミンCがはいって…」

「いらねえ」

ものすごい上機嫌な浦原とは別に、変なのを飲まされた一護は、気持ち悪くて仕方がない。

「さあ、それじゃあお勉強会でも初めますかね♪」

「ああ、はい、よろしく…お願いします」

「それじゃあ日程を発表しますかね♪黒崎サン！あそこの引き出しの上から二番目の戸に普通の紙が入ってるんで取って来て下さい」
そう浦原から言われた一護であったがまたもや浦原のフェイントに引っかけたてしまい、上から大量の猫缶が落ちて来て、生き埋めになってしまう。

「夜一さんのやつこんなところにあんのかよ!？」

そう、いい浦原のほうを見ると二人ともすでに、地下の勉強部屋に入っており、更なるフェイントに一護はかかってしまう。

「ちくしょうー!!!!!!」

いざ勉強会！（後書き）

ギャグをちよつと入れてみました。

ちなみに、次回から死神図鑑パープルをやります。死神図鑑ゴールデンとまったく同じものですが、まったく同じというのは話じやないですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0422z/>

もう一人の死神代行

2011年12月3日21時53分発行